

#### 四 終戦直後の岡崎高師―豊川市への移転―

##### ◆ゼロからの再出発

一九四五（昭和二〇）年八月一五日の終戦を迎えたとき、すでに空襲で校舎と宿舍のすべてを焼失していた岡崎高師は、文字通り「ゼロからの再出発」をする以外に方法はありませんでした。初代校長の水野敏雄は、その当時を振り返って「わが校は孤立無援、微力ながらお互いの力の限りを出しあつて、開校忽々の難局を乗り越えようとする悲壮な気魄が溢れていた」（水野敏雄「創設のころの想い出」『岡崎港師範学校―創立三十周年誌』）と回想していますが、現実には想像以上に苛酷であつたといえます。

すでに述べたように、空襲による被災後、三菱重工業針崎工場青年学校を仮校舎とし、勝鬨寺を宿舍としていました。終戦後、その宿舍は振風寮と命名され、九月二八日には入寮式が行われ、十月一日には仮校舎で始業式が行われました。

……入学後始めて学校生活らしい授業の快味を得たようであつた。校舎も工場の地域の

一区画をなし学校の雰囲気が大々ようになっていた。ここで大きく時刻を知らず振鈴、教室からもれる講義の声、休憩時に悠々と裏山に日向ぼっこをする生徒の姿などにも学校というものの、平常時が日々に戻りつつあるのが感ぜられた。校長室・事務所・応接室も整えられ、事務的処理も軌道に乗ってきた。

〔関野豊三「草創二年間」『岡崎高等師範学校誌』〕

終戦直後の再出発のようすについて、関野はこのように回想しています。

◆本格的な移転先を求めて

岡崎高師では、仮校舎での教育活動が徐々に進展するにつれて、本格的な校地・校舎の確保が緊急の課題となってきました。岡崎高師としては、創設の経緯やその校名から考えても、岡崎市内に本格的な移転先を確保するために全力を傾けました。しかし、残念なことに岡崎市内では高等師範学校にふさわしい風格を備えた校地・校舎を見つけることができませんでした。

そこで、仕方なく岡崎市外にも範囲を拡大させた結果、豊川市牛久保町中代田の豊川海軍工廠工員養成所とその宿舎が移転先候補にあがってきました。当初、水野敏雄校長は、岡崎市との関係をさしおいて移転先を豊川の地に求めることを躊躇しました。しかし、早急に移転先を

決定しなければならぬ事情もあつて、豊川移転に向けた準備が始められたのが一九四五年一〇月下旬のことでした。

#### ◆豊川市への移転

一九四五年一月二四日、名古屋軍政部から豊川海軍工廠関係施設の使用許可が出されました。当時、豊川市では、戦後再建計画として、愛知第二師範学校男子部の豊川誘致をめざすとともに、市立病院と市立農業学校の設置を構想していました。とくに市立農業学校の新設については豊川市会においてほぼ決定されており、豊川海軍工廠工員養成所の利用が見込まれていたため、岡崎高師の移転に際しての豊川市側の尽力はきわめて大きかったといえます。

岡崎高師の豊川移転は、同年一二月九日に行われました。移転後の校舎には旧工員養成所建物（正式名称は「豊川海軍工廠第二工員養成所」）が利用され、振風寮には工員宿舎が利用されました。この移転に先立って、戦災で荒れ果て尽くして「化物屋敷」のようであつた校舎を修復・設営するため、第一期生四組が一週間交代制で製炭・校舎設営・清掃の作業を行ったといわれています。



振風寮祭（都築亨氏所蔵）

## ◆振風寮

ここで、振風寮について簡単に述べておきたいと思えます。一九四六年、振風寮では、従来の舎監制度を改めて自治寮へと移行しました。ある岡崎高師一回生は、「戦後の時勢の赴くままとはいえ、当時一回生だけで未組織の学生が、教員養成学校制度という、管理的色彩の強い古い勢力に対して、断固反対を試ろみた」結果が、自治寮への移行であつたと回想しています。

当時の記録によると、一九四六年二月二日に振風寮文化部が「自治に就いて」と題する討論会を開催し、自治的な機運が大きくなったとされています。その後、同月一日には、学問の自由その他四力条からなる決議文を校長へ提出し、その翌日から四八時間の同盟休校（聴講拒否）を行っています。

ところで、振風寮での学生生活はどのようなものであったのでしょうか。ここでは、『岡崎高等師範学校五十年誌』の中から、そのようすを紹介しておきます。

だべりの中で育つ　　振風寮は「だべりの寮」でもあった。教科書はそつちのけでよくだべった。毎日、毎日よくも話があると思われる位よくだべったものだ。書物の話が出る、歴史上の人物の話が出る、恥ずかしいからその場では知った振りをして相槌を打って過ごし、後で勉強したこともある。だべりで啓発された。

ファイヤーストーム　　空腹の振風寮生にもメランコリーはとりつく。板塀が燃える。襖が燃える。突発的である。裸の若者が輪をつくる。……口上が朗々と響く。一節ごとに呼応する。乱舞がはじまる。火勢が衰えるころには、肉体も精神も燃え尽きる。ただ空虚と昇華と残骸が寮庭に残る。何も語らずに夜の帳が降りる。襖まで燃やしてしまった反省が、次の日に残る。自然発生的なストームは時折、振風寮の空をこがした。

訪問ストーム　　玄関前の電源が切られる。『ウォー』という訪問嵐が廊下になだれこむ。床下が割れんばかりの踊り狂いながら「デカンショ、デカンショ」が通り過ぎてゆく。

デカルト、カント、ショーペンハウエルの前に訪問を受けた側はただ傍観するのみでる。勢い余った嵐の余波が近隣の教授宅まで襲いかかる。「ごくろうさん、ごくろうさん。」の励ましの声が玄関口でかかる。学校による規制もなく、叱責もなく、自主規制を厳にした訪問ストームであった。

「実力」という名の夜食 誰が名付けたか、振風寮には「実力」という名の生命保持手段が存在していた。学問の実力でなく、正に「生きる」という動物的本能に根ざした「食」の供給であった。雑炊やスイトンや、サツマイモや、キューバ糖では夜を徹してのダベリのエネルギ―を保つことはできない。夜半になると飯ごうで米が研がれる。廊下や窓際で七輪の火が燃える。薪は特別購入ではなく、寮の周辺で調達したものである。銀シャリと梅干しや漬物くらいが空腹を満たした。米は親が工面してくれた貴重なものであった。農家出身であろうと、非農家出身であろうと乏しさを分かちあって空腹を満たした。実力につながる心の連帯は野性的奪い合い、いがみ合い、弱肉強食をすべて否定した。



**机がわりの弾薬箱**：戦後、振風寮で使われていました。「岡崎高等師範学校／番号5」というラベルが貼られています。もとは豊川海軍工廠で生産した機銃弾を運ぶためのものが、戦後転用されたものです。中にノート類などを入れ、ふたが机の天板となりました。

**丸イス**：岡崎高師の化学実験室で使用されたもので、その後東山キャンパスの旧教養部時代まで使用されました。「岡崎高師」の焼印がみられます。(以上、加藤貞夫氏提供)

**定規**：「岡崎高師教務課用」と書かれ、裏には「工具養成所」の焼印もあります(教育発達科学研究科提供)。

(名大史ブックレット6より転載)